医療の未来をつくる全国からの声

診療所探訪

医療と介護の一体で、地域ニーズに応える

2013年1月取材

大分県国東市
堀田医院 院長
堀田 正一 先生

国東半島の北端に位置する堀田医院は、19床の有床診療所。高齢化が進み、交通の便が悪い地域のニーズに応えるため、同院は介護老人保健施設、訪問看護ステーション、介護保険支援センターを併設して、医療と介護を一体的に提供しています。

県北や国東半島全域からリウマチ患者さんが来院

堀田医院は戦後間もない昭和21年、現院長の堀田正一先生の父親が開業しました。同院は長年にわたり、内科全般の幅広い診療を行ってきましたが、堀田先生が平成11年に院長職を引き継いでからは、特に専門である膠原病・リウマチ疾患に注力しており、大分大学医学部内科学第一講座と連携を図りながら、最先端の医療を提供しています。「地域には専門医がほとんどいないので、他院からの紹介患者さんも多いですね。かなり遠方から来院される方もいます」と堀田先生。国東半島は日本の秘境100選にも選定されているように自然環境が豊かな一方で、交通の便が良くありません。それにもかかわらず、同院には堀田先生を頼って、多くの患者さんが訪れているそうです。堀田先生は、週1回は市民病院でも膠原病・リウマチ外来を担当しているとのことです。

公共の交通機関はバスのみですが、同院の前に停留所があり、便利です。

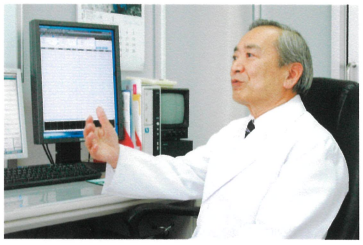
“医の心を持って患者さんに接する”をモットーに

診察室の窓側、スタッフの通路にあたる部分には業務の効率化のため、幅広いスペースが確保されています。

堀田先生は長年にわたり大学病院に勤務していました。母校の恩師である東京慈恵会医科大学第三内科、阿部正和教授から内科医としての心構えについて教えを受けたとのことです。「診療を続けていると、マンネリ化して初心を忘れそうになることがあります。書斎の机の、セピア色になったポートレートとともに書かれた先生の教え“医の学を深め、術を磨き、医の心を持って患者に接したい”を見て気持ちを引き締めています。また、患者さんを診るときは、“いつも患者さんの立場に立って誠心誠意診療に当たれ”も肝に銘じています」と話します。「例えば、リウマチ治療においてはなるべく廉価で副作用のない治療をめざしていますが、生物学的製剤のような高価で強力な治療を選択せざるを得ない時には、患者さんの身体状況や経済状態などを考慮しなければいけません。このような時に患者さんの立場に立ったアプローチが欠かせません」とも。

医療と介護のトータルサービスを地域に

同院が有床としている理由の一つが、過疎地に立地していることです。「一番近い連携先でも車で40分かかります。重症の場合はなるべく紹介しますが、患者さん、ご家族の中には遠隔地へ入院されることを希望されない方がいらっしゃいます。そういう方々の受け皿が必要になります」。介護事業を始めたのも、地域の著しい高齢化に対応するため。その取り組みの背景には、常に地域ニーズがあるのです。現在、全体で60名強のスタッフを抱える医療法人を運営する一方で、市営の特別養護老人ホームの嘱託医も務めるなど、24時間対応を心掛けた精力的な活動を続ける堀田先生。「これも父から引き継いだ使命です。これからも地域のためにできるだけのことはしていきたいと思っています」と決意を述べられていました。



「都会と地方の格差が広がっており、過疎地での医療経営はこれからますます厳しくなっていくでしょう。深刻な問題だと思います」と堀田先生。